

第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

高校生の部 優秀賞 受賞作品

ありがとう、そして。

東京都

東京都立千早高等学校

二年 大河内 彩和

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

ありがとう、そして。

東京都立千早高等学校 二年
大河内 彩和（おおこうち・さわ）

二〇一九年の夏。高校一年生だった私はたった数ヶ月で高校を自主退学した。理由は精神的苦痛及び体力的な限界が来たことにより学校を辞めざるを得なくなったからである。これは私にとって人生で初めての挫折だった。

希望を抱いて志望校の校門をくぐった先には自分が思い描いていた高校生活とは全く正反對の道歩んでいった。まず初めに感じたのはクラスメイトとの距離感。特別いじめにあったわけでも何かが起こったわけではない。だが言い知れぬ孤独に襲われた。私が通っていた高校は自分の家からは一時間半もかかる場所で、今まで接してきた友人のどれにも当てはまらない人ばかりだった。ここで私は地域の環境によって人の性格が全く違うことを知る。友達と呼べる友達は居なく、入学からひと月経っても慣れることは無かった。その代わりに周りに置いていかれているという焦燥感だけが積もっていった。

次に自分を追い込んだのは部活動の選択だった。中学で三年間やっていた吹奏楽部には入らずに遠いことを理由に日数が少ない英語部へと入った。活動も緩くすぐに物足りなさを感じて夏休み直前に、高校野球が好きだからという理由で野球部のマネージャーへと転部。がむしろに色んなことに手を出してみれば変わると思ったが何をしてても心が満たされることなく、ただ一方的に空回って最終的に自分を苦しめ続けただけだった。

私の中学生は華々しいものだった。生徒会をきっかけに信頼を置かれ、勉強と部活の文武両道。行事にも精いっぱい取り組むまさに優等生。一言では語れないほど中学の思い出は四季のひとつひとつに詰まっている。一番忘れられないのは、卒業式の校歌で指揮を振った時の舞台上の景色。涙声の女子とそれを支えるかのように力強い男子の歌声。保護者や教員も涙を滲ませてこれ以上無い卒業式だった。幸せだった。何もかもが上手く行った幸福のピークでもあった。だからこそ、高校では無力の自分が悔しくて堪らなかった。試行錯誤で燃え尽きた心を埋めようとしても、私は中学と同じものを求めていた。高校に入ってから私の原動力が中学で支えてくれた人たちだと気づかされた。

最後の最後まで悩んだ末の答えは自分の弱さを受け止めるための決意だった。ただ単に逃げたくて辞めたわけではない。私は支えてくれた人たちを今度は支えたいという夢があった。その為に私は高校受験をもう一度受けることにした。普通の高校生とは全く違う道を歩むことにした。常識から外れることは容易なものではなかった。再受験までの約半年間、学校ではなく図書館へ通った。朝の九時にも関わらず私服で行くのは中々に堪えた。夕方に家へ帰る際に見かける制服の学生を見ると自分が社会から外されたような気持ちになった。それでも諦めようとは思わなかった。もう一度未来を作ること止めようとは思わなかった。

それは書類を作成する際に中学校へと寄った時のことだった。私の事情を深堀りするわけでもなく、三年生の時の担任の先生や生徒会で関わった先生達に温かく声をかけられた。女性の先生からは抱きしめられたこともあった。私はどれだけ恵まれているのだろうと思った。こんなにも優しく迎え入れてくれる先生方に胸を強く打たれた。

私は決意を改めて再受験へと専念した。二度目とはいえ気は抜かずに無事一般入試で合格した。諦めたものをもう一度やり直すことにリスクはあったがそれ以上に、中学の思い出だけで自分の全てを終わらせたくなかった。

異例ともいえる経験を胸に私は今高校生活を送って二年目になる。前回のようには煌びやかな思い出に引きずられることはなく、平凡な日常を送っている。背伸びをしすぎず頑張りすぎず、たまには息抜きをするなど。どこにでもいるような高校生の当たり前を送っている。しかしこの日々が当たり前だと私は思っていない。新型コロナウイルスが流行る前から学校があることの有り難みを誰よりも早く理解した。毎日を学校で過ごせること、制服で過ごせること、人と関わりがあること、全てに意味があると思っている。

現在、こうして笑顔で学校生活を送れているのは紛れもない挫折の時を支えてくれた中学校の先生並びに家族や友人のおかげだ。そんな人たちに伝えたいのは感謝だ。だがそれよりも前に、言いたいことがある。

「私はいま、幸せです。」と。